第９８号　2017 年５月 31 日

東日本大震災 復興･支援活動ニュースレター
カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

札幌カリタスが宮古ベースを創設した 2011 年以来、札幌のアンサンブルグループ「奏楽（そら）」は、ずっと支援を続けてくださっています。神奈川県川崎市にあるカリタス女子中高の生徒さんたちも、最初からボランティア活動を続けてくださっている学校です。２つのグループは「出会い」を大切にそれを積みあげてくださっています。石巻ベースや、東松島などで、「すすきだ音楽隊」と、「かりたす寄席」が行われ、多くの被災者に喜ばれました。今回、福島県双葉町から避難して来られた方々の仮設住宅が閉鎖されることに伴い､傾聴活動をしていた「白河みみずく」が活動の区切りをつけ、「追悼と感謝のミサ」をささげました。今号も盛りだくさんのニュースをご紹介いたします。

アンサンブルグループによる支援演奏

札幌カリタス宮古ベース

札幌の若手演奏家によるアンサンブルグループ「奏楽（そら）」は、2011 年秋以来、東北被災地への支援演奏を続けています。ある信徒の紹介で、札幌カリタスが援助することになりました。援助といっても、交通に要する費用と宿舎の提供だけのこと、初めの年はお聖堂での雑魚寝でした。

リーダーは札幌交響楽団元主席オーボエ奏者のＩ氏で、毎回氏自ら運転するワンボックスカーにメンバーと楽器を山積みし、巡業よろしく演奏活動をこなします。私たちの役割は、会場の選定とそこへの道案内ですが、時には案内役が逆になることもあるほどに、メンバーの皆さんは宮古の地理には詳しくなられました。

2015 年からは、春・秋２度のツアーを組んでくださっています。1 ツアー9 回ほどの公演で、これまでの演奏回数は 80 回を超えています。

会場は様々。宮古教会のお聖堂、仮設や公営住宅の集会室、公民館、幼稚園や学校、障がい者・老人施設、病院待合室、道の駅や市場でも演奏してきました。宮古市はもとより、以前は大船渡市や陸前高田市でも演奏しましたが、最近はお隣の山田町、今回から岩泉町でも演奏しています。

クラシック音楽は敬遠されがちでしたが、歌謡曲や子ども向けの曲も織り交ぜられ、回を重ねるごとに聴衆は増えて、今やリピーターや“追っかけ”の方もおられます。

「心の底まで浸みました」｢間近で聴いて本当に素晴らしかった｣｢力づけられました」との声は毎度いただきますし、聴きながら目頭を押さえる方もお見受けします。

岩泉町　「てどの蔵」

仮設住宅談話室

公民館

宮古教会

素敵な音色で癒してくれる「奏楽」の皆さんに対し、参加者から、「力づけられました」「心の底まで染みました」「今までにあったイベントの中で最高だった！」との感動の声が、いずれの会場でも聞かれました。
また、宮古教会での演奏会には、過去最高の４５名の方が参加し、音楽を楽しんでくださいました。

ある会場では､これからピアノを習うという男児に｢トルコ行進曲｣の演奏がプレゼントされ､それを間近で見たその子はピアニストに｢きれい、大好き｣と声をかけてくれました。必ずのようにアンコールが求められ、予定時間をオーバーする事態に、タイムキーパー役としてはハラハラすることも。

「また来てください」の声もしばしばで、演奏者も「また来ます」とついおっしゃるのですが、会場を変えてより多くの方たちに聴いてほしい願いとまた行ってあげたい思いがぶつかり、次回もまた会場選定には少しばかり悩むことになるでしょう。

演奏に夢中で聴き入る男の子

演奏後、来場者を握手でお見送り

「出会うこと」

カリタス女子中学高等学校　教諭　森　匡史

本校では、東日本大震災後すぐの夏休みに、初めて高校生を東北の被災地に送り出しました。教員の引率のもと、２つのグループが石巻を訪れ、避難所でのお湯出しなどのボランティアをさせていただきました。それ以来、本校では春・夏・冬の長期休暇の度に、高校生のボランティアを東北へ派遣しています。生徒数名に教員１名というグループで出かけて行き、カリタスのボランティアベースにお世話になりながら、石巻市、南三陸町、釜石市などで活動に参加させてもらっています｡私自身､これまで何度も生徒を連れて南三陸町を訪れました。

ボランティアに参加した生徒たちは皆、「もっといたかった」「また行きたい」と言ってくれます。実際にリピーターになる生徒もたくさんいます。２回目からは学校のプログラムではなく個人でボランティアに参加する生徒も多くおり、これまでにのべ 260 名の生徒が、ボランティアとして東北を訪れてきました。中には、卒業してからもボランティアに参加してくれている人もいます。

お茶っこや休憩時の地元の方との会話は、楽しい時間の中にも多くの学びがあります

そして、そんな生徒たちの動きを励まし支えたいという思いから、4 年前には「カリタス被災地ボランティア支援制度」が創設されました。保護者や教職員、卒業生などに募金を呼びかけ、ボランティアに出かけていく生徒たちに交通費などの金銭的な支援を行っています。

それではなぜ、ボランティアに参加した生徒たちは皆、「また行きたい」と言うのでしょう。一体何がそんなに生徒たちを惹きつけるのでしょうか。その秘密は「出会い」ではないかと思います。

漁師さんや農家さんのところにお手伝いに行くと、いつも私たちを温かく迎えてくださいます。素人である私たちがお役に立てることはわずかですが、それでも私たちが行くと喜んでくださり、笑顔で「ありがとう」と言ってくださいます。生徒たちはそれがとても嬉しいようです。「自分が少しでも役に立てている」「自分が行くと喜んでもらえる」という経験は、生徒たちにとって大きな意味を持っているように思います。

被災地視察（南三陸町旧防災庁舎前）

漁業支援

また、ボランティア先での出会いは、生徒たちを大きく成長させてくれます。生徒たちは、様々な出会いを通して視野を広げ、自分自身を見つめ直します。自分の学校生活に対する姿勢を省みたり、将来の進路について考えたりする生徒もいます。「ボランティアに行って私は変わった」と、ある生徒は私に言ってくれました。

生徒たちはボランティアを通して、たくさんの素晴らしい出会いを経験します。そしてそこから色々なものを受け取って帰っていきます。だからきっと、また行きたくなるのだろうと思います。そんな出会いを積み重ねていく中で、生徒たちにとって東北が第二の故郷のような、特別な場所になっていけば良いなと思っています。

本校では、これからも生徒たちをボランティアとして派遣し続けたいと考えています。実際に自分の足で東北を訪れ、出会うことにこそ大きな意味があると思うからです。ボランティアといっても「何かをしてあげる／してもらう」ということではなく、たくさんの出会いを通して、復興への道のりを一緒に歩んでいくことができたらと思っています。

「すばらしいことを神様のために！」
―お疲れ様でした　白河みみずく―

仙台教区サポートセンター　　濱山　麻子

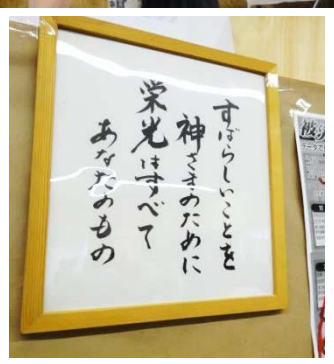
4 月 20 日、福島県のカトリック白河教会で、「追悼と感謝のミサ」が行われました。このミサは、双葉町（原発事故により現在もほぼ全域が帰還困難区域となっています）から避難してこられた方々への傾聴ボランティア活動を続けてきた「白河みみずく」が、支援先の仮設住宅の閉鎖に伴い、活動にいったん区切りをつけるということで、これまで関わってこられた方々を招いて行われたものです。

ミサは仙台教区の平賀徹夫司教、東京教区の幸田和生司教、太田勝神父（福音の小さい兄弟会）、塩田希神父（イエスの小さい兄弟会）、伊藤淳神父（東京教区・清瀬教会）、エテメ神父（白河教会）の共同司式で行われました。説教の中で平賀司教は、活動を続けてきたメンバーをねぎらいながら、「すべては神様がさせてくださったこと」と話しました。共同祈願では、大阪教会管区部落差別人権活動センター発行の「十字架の道行き」を使い、反原発への祈りを参加者全員で唱えました。

ミサの後、信徒会館へ移動し、ボラパックの形でみみずくの活動に協力をしてきたカトリック東京ボランティアセンター（CTVC）の漆原比呂志事務局長の乾杯の音頭で、感謝の宴が始まりました。会場は、集まった 50 人ほどの参加者がメンバーをねぎらう声、再会を喜ぶ明るい声で満たされました。仮設住宅でのイベントに一役買っておられたお団子屋さんが、会場の外で、迫力満点の餅つきで、おもてなしの心があふれたテーブルいっぱいのご馳走に、さらに華を添えました。下関から駆けつけた援助修道会のシスター山本紀久代さんがギターの弾き語りをし、みみずくメンバーの金澤弘子さんによる「知床旅情」の替え歌「白河旅情」、そして「平和の大工」（シスター山本作詞・作曲）、「一人の手」と続き、最後は全員で手を取り合って歌いました。

信徒会館の壁には、これまでの関わりで生まれたたくさんの笑顔の写真、原発事故や被災地の現状についての資料が掲示されていました。その中に一枚の額があり、「すばらしいことを神様のために　栄光はすべてあなたのもの」とありました。震災がなければ、原発事故がなければ、関わることがなかった人々、気づかなかったこと。みみずくの皆さんは、目の前におられる方々に、耳と心を傾け続け、祈り、その活動を通して感じたことを発信してこられました。深く傷ついた方の心に向き合うことは、決して簡単なことではないと思います。そのすべては神様がさせてくださったこと、と感謝しておられる姿に、ただただ頭が下がる思いでした。

「傾聴が生き方になってしまった」というみみずくの５人のメンバーは、これからもその歩みを続けていくということでした。そして「祈りと癒し　回心の古民家　知足庵」（福島県鮫川村）の世話人として奉仕を続けていくそうです。「ぜひお越しください。必ず得るものがあります」と代表の金澤さんはおっしゃっていました。



「白河みみずく」の皆さんをねぎらうため、各地から多くの方が集まりました

すすきだ音楽隊 東北スプリングツアー

仙台教区サポートセンター　　濱山　麻子

４月 26 日・27 日、石巻ベースのオープンスペースと東松島市のひびき仮設住宅で、ミニコンサートが行われました。これまでに何度も石巻に来てくださっている「すすきだ音楽隊」の皆さんが、春のツアーで来てくださったのです。

すすきだ音楽隊は、よみうり交響楽団のヴァイオリン奏者、薄田真さんの呼びかけで、打楽器奏者のすすきだ真樹さん、そしてその時々で様々なジャンルの演奏家の方々が加わり、2013 年から岩手・宮城の仮設住宅集会所などで音楽を通じた支援活動を続けていらっしゃいます。今回は薄田さんのヴァイオリン、真樹さんのマリンバ、竹澤悦子さんの琴と三味線、そして舞踊家の高橋純一さんのダンスという、とても珍しい組み合わせのコンサートになりました。

普段なかなか味わえない音楽とダンスを皆さん楽しんでいました

26 日は、ベースのオープンスペースでの開催。午後 1 時半からの開演を前に、28 人のお客様が入り、客席はほぼ満員となりました。すでに石巻ではおなじみとなっているメンバーは、ご挨拶をしながら客席に懐かしい顔を見つけて笑顔を交わしていました。

演奏が始まると、マリンバと和楽器の不思議なハーモニー、そして指先まで使いこなしたダンスに、皆さん身を乗り出して聴き入り、見入っていました。決して広くはないオープンスペースで、客席と演奏の皆さんの距離がとても近く、楽器を奏でる手の動きや表情までよく見ることができました。

素敵な演奏の後は、高橋さんの指導でワークショップが始まりました。まずは簡単なストレッチ、そして隣り合わせた方々とグループを作り、餅つきの動きを取り入れた踊りをしました。なかなかテンポが合わずに、お互いに顔を見合わせて笑いだしてしまうグループ、乗りに乗って「超・高速餅つき」をして爆笑を誘うグループなど、会場全体が熱気と笑いで満たされました。

翌日は東松島市のひびき仮設で、薄田さんも加わっての演奏になりました。こちらでも演奏とワークショップで、楽しい時間が流れました。

すすきだ音楽隊の皆さんは、「また来ます」とお約束してくださいました。またお会いできることを、石巻、東松島の皆さんも、ベーススタッフも楽しみに待っています。

身体全体を使って行うワークショップは、参加者に好評でした！

「かりたす寄席」は笑いの渦に包まれて

仙台教区サポートセンター　　長谷川　昌子

５月８日、石巻ベースオープンスペースの午後は、笑いに包まれていました。たぶん、ベースの外にも「笑い菌」が飛び散っていたのではないかと思われるほどでした。それは、「かりたす寄席」が開かれたからです。

「午後１時の開場が待ち遠しかったよ」と言いながら５、６人が入って来られたのを皮切りに、次々に人が集まり、スタッフはイスを増やしたり、案内するのに大わらわ。寄席の高座をつくったりしたので、来場者は約３０人でいっぱいになりました。参加した方々は、被災で受けた心のつらさを忘れ、笑顔を取りもどしたひとときでした。

「かりたす寄席」の出演者は、春風亭愛橋さんと唯我（ゆいが）さん。春風亭愛橋さんは、サラリーマン生活を経て、春風亭柳昇さんの門下に入った人。柳昇師匠のご死去後、昔昔亭桃太郎門下に入り、2012 年真打ちに昇進し、春風亭愛橋を襲名し、活躍中の落語家さんです。大震災以後、陸前高田、大船渡、気仙沼などで落語を生かしたボランティア活動で多くの人に喜ばれた経験から、このたびの石巻ベース訪問となったものです。

「牛ほめ」を熱演される春風亭愛橋さん

字遊び 「黄米」はなんと読むでしょう？

今回は、女性プロレスラーであり、落語家の卵である唯我さんとご一緒に、楽しい寄席を展開してくださいました。まず、前座として唯我さんの落語、愛嬌さんのショート落語、昔話による落語、字遊びなどで楽しんだあと、唯我さん対リラックマのプロレス対決で大笑い。その後、愛橋さんによる落語と踊りで、あっと言う間に楽しい時間が過ぎてしまいました。

お二人のお話に観客がすぐに反応して、その反応に答えてお話をしてくださり、語る人も聞く人も一つになっていると感じるとても楽しいひとときでした。愛橋さんも、唯我さんも「とても反応があったのでやりやすかったです」と喜んでおられました。

翌９日も、ひびき仮設での「かりたす寄席」で、多くの人に笑顔を取り戻させてくださいました。

落語「お見立て」を話された後、プロレスも披露してくださった唯我さん

ニュースレターのメール配信をご希望の方は、お名前などをご記入の上、ｓｄｓｃｋｏｈｏ@ｇｍａｉｌ．ｃｏｍまでメールをお送りください。多くの方に活動状況や被災地の現状を広めていただけますようお願いいたします。